

目 次

論 文

西アジア都市形成期の土器焼成技術

—分析方法の提案と焼成温度・彩文顔料の考察—

小泉 龍人 1

エジプト中王国時代のミニチュア土器使用に見られる「単位」について

矢澤 健 23

研究ノート

骨角器インダストリーに見る新石器化の一側面

—技術選択と原材料からの検討—

新井 才二 47

資料紹介

初期イスラーム時代のファイユーム陶器

—ベナキ博物館所蔵資料から—

長谷川 奏 57

動 向

アルメニアの文化遺産分野における日本の国際協力

有村 誠・藤井 純夫 61

紀元前5千年紀イランをテーマとした国際ワークショップ

三木 健裕 69

イラン、テヘラン大学で開催された「若手考古学者国際会議」に参加して

安倍 雅史・三木 健裕 75

米国オリエント学会 2013 年大会

近藤 康久 79

報 告

日本西アジア考古学会 2012 年度ワークショップ A「西アジア青銅器時代の葬制」報告

久米 正吾 83

西アジア考古学関連学術論文・出版物

87

西アジア発掘調査報告会報告一覧・調査彙報

93

投稿規定・執筆要項

95

編集後記

アルメニアの文化遺産分野における日本の国際協力

有村 誠・藤井 純夫

Japan's International Cooperation in Cultural Heritage in Armenia

Makoto ARIMURA and Sumio FUJII

キーワード：アルメニア、文化遺産学、日本の国際協力

Key-words: Armenia, cultural heritage study, Japan international cooperation

コーカサスは西アジアの北端に位置し、西の黒海と東のカスピ海に挟まれたアジアとヨーロッパを結ぶ陸の回廊である。コーカサスの中央には、東西約千 km にわたって延びる大コーカサス山脈がそびえたつ。5000 m 級の山々が連なる大コーカサス山脈は、古来より西アジア世界における北の障壁として存在してきた。古代の西アジアや地中海世界の住人からみると、ここが世界の最果てであるかのようにはみえたことだろう。ギリシア神話でプロメテウスがその犯した罪のために磔にされた場所が、この「大地の涯^{はて}のとお境、人気もない荒れた荒野」のコーカサス山脈であったとされるのも頷ける（アイスキュロス 1974）。一方、北のロシアからみれば、大コーカサス山脈の南側は、コーカサスの向こう側（ザカフカース）であって、自分たちと異なるイスラーム教徒や似て非なるキリスト教徒の住む一種別世界の趣があったかと思われる。

今日では、コーカサスを大コーカサス山脈によって南北に区分して呼び分けることが一般的である。本稿で触れるアルメニアが位置するコーカサス山脈の南側一帯は、トランスコーカサスや南コーカサスと呼ばれる。地形的にみると、南コーカサスの大部分は、タウロス山脈やザグロス山脈と同じく、西アジア北部に隆起した山塊に属す。そのため南コーカサスには、クラ平野やアララト盆地といった沖積平野を除くと、概して平地が少ない。大小の山々が連なる風景がこの地域の特徴である。

南コーカサスの歴史は極めて複雑である。それは、この地域が古代より東西二大陣営の接触地帯であったからである。この地は、はるか古代においては西のローマ・ビザンツ帝国と東のペルシアがせめぎあい、そして近世ではトルコとペルシアに、さらには 18 世紀以降南下政策をとるロシアに取り込まれるなど、常に外国の勢力に干渉されてきた。

一方、支配者からすると、この地域は、その小さな山間

盆地や溪谷からなる入り組んだ地形のために、支配の網がとどきにくい、難治の地であった。こうした地理的条件は、コーカサスに実に多くの少数民族を生み出す要因となり、他方で他に類をみない独特な有形・無形の文化が残る下地となった。

現在、南コーカサスで国際的に承認されている国家は、ソ連邦崩壊後に独立したアルメニア、グルジア、アゼルバイジャンの三共和国である。これら三つの共和国間には大小さまざまな問題が存在し、さらには地域内に独立志向の強い少数民族も内包することから、この地域は政治的に安定しているとはいいがたい。さらに、こうした状況に加えて、ロシア、EU、アメリカの各陣営の思惑とイスラーム原理主義勢力の伸張もあり、政治情勢は極めて複雑である。

一方、日本とコーカサス諸国との間には、政治的にも経済的にも接点がほとんどないことから、それほど結びつきは強くない。それゆえ、南コーカサスの文化遺産分野¹⁾における日本人の関わりは、これまでごく限られていた。後述するアルメニアにおける篠野志郎教授による教会建築の調査や 2008 年より開始された東京大学の西秋良宏教授によるアゼルバイジャン共和国のギョイテペ遺跡の発掘調査などが代表的なものであった。

こうした中、アルメニア共和国では、最近、文化遺産分野においてさまざまな活動が開始された。そのいくつかは筆者らも関わっており、本稿では、こうした同国における日本人の活動を紹介したうえで、これからの展望について述べたい。

1. アルメニアの文化遺産と日本の支援

アルメニアは、非常に古い歴史をもつ民族である。イランのベヒストゥーン碑文に、ペルシアの敵国の 1 つとしてアルメニアが登場していることから、少なくとも紀元前 6 世紀ころまでには、なんらかの民族国家が形成されていた

と考えられる。この後、アルメニアの名は、ヘロドトスの「歴史」やクセノフォンの「アナバシス」など古代ギリシアの記録にたびたび登場する。歴史上アルメニア最初の国家とされるのは、アルタクシアスⅠ世により建国されたアルタクシアス王朝である（紀元前189年）。この王朝に、今日もアルメニアの人々に、王の中の王、ティグラン・メッツ（大王）と親しまれるティグランⅡ世（紀元前95～55年）が現れる。彼の治世下で、アルメニアの領土は、民族の故地とされるアルメニア台地を越えて、地中海のキリキア、シリア、北メソポタミアまで含む広大なものとなった。今のアルメニア人は、往時のアルメニアの興隆に思いをはせ、また現在のアルメニア共和国の縮小された領土を嘆き、この最大版図の古代アルメニアを「大アルメニア」と呼ぶ。

今日、世界的にアルメニアを有名にしているのは、最古のキリスト教国としての一面だろう。アルメニアは4世紀初頭に、世界ではじめて国家としてキリスト教に改宗した国とされる。キリスト教が、長くこの民族のアイデンティティの拠りどころとして中心的な役割を果たしたことは、博物館に数多く展示されるキリスト教関連の文物の多さをもみても想像に難くない。度重なる異教徒の侵入や支配にもかかわらず、アルメニア民族が今日まで残りをえた要因の1つは、古来より継承されるアルメニア的キリスト教の教義が、民族の団結に大きく役立っていたからだと思われる。

アルメニアを代表する文化遺産である教会建築は、現在のアルメニア共和国内にも数多く残されている。東京工業大学の篠野志郎教授によるアルメニアの教会建築の調査研究は、アルメニアにおいても高く評価され、同国の文化遺産分野における日本人の貢献として、極めて重要な活動として位置づけられる。しかし、同教授による調査を除くと、これまでに文化遺産分野における日本人の活動はほとんどみられなかった。

一方で、アルメニアを対象とした日本政府による資金的支援は、長期にわたり行われてきた。外務省のHPを参照すると、アルメニアに対してこれまでに実にさまざまな支

援活動が行われてきたことがわかる（表1）。一般文化無償や草の根文化無償といった枠組みで援助がなされてきており、その資金総額は、他のコーカサス2国と比べても遜色はない（アルメニア、グルジア、アゼルバイジャンに対してそれぞれ総額2.64億円、1.04億円、2.78億円の援助）。日本は、コーカサス三国では唯一アルメニアに大使館を置いていないが、アルメニアにとって日本の在外公館がないことは、資金援助を見る限りマイナスにはなっていない。

しかし、こうした資金面での日本の国際貢献のあり方には、問題も生じている。特に、アルメニア現地においてよく聞かれるのが、日本から支援後のフォローアップがないことである。表1にみられるようなプロジェクトの中で供与された機材の中には、メンテナンスが必要なもの、交換が必要なものが当然含まれている。日本からの機材供与後、どのような活動を実施できたのか、または、どのような問題が生じているのかといった聞き取り調査は、フォローアップのひとつとして継続的に実施すべき点かと思われる。また、このような調査は、実施した支援事業そのものを評価するという観点からも、必要であろう。

日本として、永久に機材供与案件のフォローアップを続けることは当然不可能なことである。この点を考えれば、例えばアルメニア側で修理や交換可能な機材を選択するなどの配慮があるべきと思われる。逆に、日本でしか手に入らない部品や資材、日本でしか修理ができない特殊な機器については、供与すべきではないだろう。

現地の文化遺産分野の関係者に話を聞くと、現在一番必要なのは、後継者の育成であることを強く感じる。機材供与という単発の資金援助ではなく、資金的に大きな援助でなくとも、次世代の育成を見据えた人的交流やワークショップ等の活動が、支援のあり方として今求められているのではないだろうか。最新の日本製の機器をほしがる関係者ほど、機器を使って何をするのかというビジョンがない人が多い。以下で触れる、最近のアルメニアにおける日本人専門家の活動は、これまで資金面に偏っていたさらい

表1 アルメニアの文化分野に対する日本の資金協力

資金協力	年度	事業名
一般文化無償	1999年度	国立交響楽団に対する楽器・音響機材供与
	2001年度	マテナダラン古文書館に対する古文書保存機材供与
	2002年度	アルメニア国立オペラ・バレエ劇場に対する音響機材供与
	2004年度	エレバン・スポーツ文化センターに対する音響機材供与
	2008年度	エレバン国立音楽院に対する一般文化無償資金協力
	2009年度	アルメニア国立美術館美術品修復機材整備計画
草の根文化無償	2007年度	マテナダラン古文書館に対する古文書保存機材フォローアップ計画
	2009年度	アルマヴィル村音楽学校改修計画
	2012年度	アルメニア日本センター改修計画

参考：外務省HP <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/armenia/data.html#06> (2013年7月10日アクセス)

のある日本の支援に対して、人的交流、人材面の育成に重きを置いている点に特徴がある。

2. 東京文化財研究所とアルメニア歴史博物館との共同事業

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所（以下、東京文化財研究所）とアルメニア文化省は、2011年6月に「文化遺産保護のための協力に関する合意書」を取り交わし、文化遺産保護の分野における両機関の包括的な協力体制がはじまった。この合意に基づき、東京文化財研究所文化遺産国際協力センターは、アルメニア歴史博物館と共同で、考古金属遺物の保存修復に関する活動を開始した。具体的には、アルメニア人保存修復家の育成を目的としたワークショップの開催と、アルメニアと周辺諸国との文化財の保存修復に関する情報交換や人的交流の促進である。2012年初頭にはじまった同プロジェクトは、4年間の予定で組まれており、2014年度まで継続予定である。

アルメニア人保存修復家の育成を目的としたワークショップでは、アルメニア歴史博物館収蔵の銅合金遺物を対象として、調査、分析、保存修復処置、保存管理にかかわる一連の活動を実施している（図1-4）。特に金属の自然科学的な分析や考古学情報を加味することで、アルメニアにおける銅合金の技術史の解明といった学術調査にも取り組んでいる。その成果の一部については、報告書や論文という形で公表されており、活動の詳細についてはそちらを参考されたい（東京文化財研究所文化遺産国際協力センター 2013、藤澤ほか 2013）。一般にアルメニア歴史博物館の収蔵品は、その美術的・歴史的価値の高さから「国宝」との扱いを受け、分析や保存修復処置の許可がとりにくいものばかりである。しかし今回、上述のように、東京文化財研究所がアルメニア文化省と合意書を締結したことで、収蔵品を実際に扱うことが可能となった。「国宝」とされる博物館収蔵品の新たな価値を明らかにするうえで



図1 顕微鏡下での金属遺物の状態調査
(写真提供：東京文化財研究所)



図2 金属遺物の保存修復処置
(写真提供：東京文化財研究所)



図3 写真撮影の実習
(写真提供：東京文化財研究所)



図4 XRFによる金属遺物の材料分析
(写真提供：東京文化財研究所)

も、本事業による活動は高く評価できる。

これまでに東京文化財研究所文化遺産国際協力センターは、海外の文化遺産保護分野への協力活動を数多く行ってきた。活動方針のひとつに、協力する相手国に文化遺産保護における地域拠点の役割を担えるように支援するというものがある。毎年、海外のさまざまな機関から日本へ文化遺産保護のための支援要請が出されているが、その全てに国立の研究機関である東京文化財研究所が応えていくことは、人員の上でも資金面でも難しい状況にある。そこで、地域拠点をつくることで、協力・支援活動の輪を広げていくという方策がとられてきた。文化庁が行っている「文化遺産国際協力拠点交流事業」とも連携しながら、これまでに中央アジアや東南アジアなどで、文化遺産保護に関わるさまざまな活動を展開してきた。

アルメニア歴史博物館との共同事業においても、文化庁「拠点交流事業」の支援を受けながら、アルメニアがコーカサスや周辺諸国における文化遺産保護の拠点となるような活動を展開中である。これまでに開催してきたワークショップやシンポジウムでは、グルジア、ルーマニア、イラン、イラク、ロシア、カザフスタン、キルギスなどからアルメニアへ専門家を招へいし、少しずつではあるが、専門家同士、お互いの顔の見える国際的なネットワークづくりが形になってきた。

3. 国際交流基金主催アルメニア歴史博物館における染織品保存修復ワークショップ

同じくアルメニア歴史博物館で実施中のプロジェクトが、染織品保存修復ワークショップである。国際交流基金の事業として、染織品の保存修復専門家である石井美恵（東京文化財研究所）と日本刺繍の専門家である横山翠（NHK文化センター）の2人によって、2011年より開催されてきた。

このプロジェクトは、アルメニア側から染織品文化財の保存領域で人材育成の要請があり、それを受けて国際交流基金が日本人専門家の派遣と人材育成事業の実施を決定したことから、はじまったものである。同プロジェクトを開始するにあたり、国内最大規模の染織品コレクションを有し、またスタッフも充実していることから、アルメニア歴史博物館が中心的役割を果たすこととなった。アルメニア歴史博物館を拠点とすることで、アルメニア国内のさまざまな研究機関や博物館から染織品の保存修復専門家またはそれに興味を持つ人々を集めることが可能となった。アルメニアでは、異なる機関の専門家が顔を合わせたり、意見交換をしたりする機会がほとんどないらしく、今回のワークショップの企画はアルメニア人専門家同士の意見交換や技術交流にも貢献している。



図5 染織品保存修復ワークショップ開催のセレモニー
(写真提供：石井美恵)



図6 顕微鏡下での染織品の観察
(写真提供：石井美恵)

これまでに計5回のワークショップが開催された。ワークショップでは、保存修復に関する基礎的な知識に関する講義にはじまり、実際の博物館収蔵品の修復を手掛ける実習、日本刺繍の技法のデモンストレーションまで、さまざまな項目がプログラムの中に含まれている（図5-7）。

石井らの活動方針には、海外での文化遺産保護分野に日本人がかかわる際に参考とすべき点が多い。一般に、海外での文化遺産保護への協力では、日本の優れた技術や制度をパッケージとして海外に「輸出」するやり方を多く目にする。それに対して、この染織品のワークショップでは、日本人専門家も自身の知識・技術を披露する一方で、アルメニア人の染織品保存修復家からもアルメニアの伝統的な技法を学ぶという姿勢がみられる。いわば、専門家の間で対等に染織品修復技術の交換を行っているわけであり、日本人とアルメニア人専門家のコミュニケーションによって



図7 染織品ワークショップにおける専門家間の技術交流
(写真提供：石井美恵)



図8 アルメニア考古・民族学研究所で実施した考古学セミナー

ワークショップが運営されている。このあたり、同ワークショップの雰囲気が良好であることに通じている。

博物館で扱われる染織品は近現代の民族資料が多いが、まれに土中から出土した考古遺物を扱わねばならない時もある。その代表が、先年、世界最古の革靴として注目を浴びた銅石器時代のアレニ（Areni）洞窟出土の考古染織品である（Pinhasi et al. 2010）。革靴以外にも、バスケットや敷物といった通常では残れないような製品が、洞窟という特殊な保存環境のおかげで多数発見された。これら考古染織品の処置に苦心していた現地の要請を受け、石井らは、考古染織品の保存修復に関する特別なワークショップも開催し、対応していた。貴重なアレニの考古染織品の保存方針が定まったようである。

また、毎回ワークショップのために、大部の英語・日本語・アルメニア語併記の教科書が用意される。その準備のための労力にも頭が下がるが、何よりも文化遺産の保存修復という文字記録として残ることが少ない分野で、教科書を作成することは、ワークショップ参加者の備忘録としてだけでなく、次世代にとっての貴重な文献となる点が極めて重要である。少なくともアルメニアにおいては、染織品の保存修復に関する唯一の総合的な文献となり、ワークショップに参加できなかった関係者からも入手を望む声も多い。将来的に、アルメニアで出版していくことも検討すべきかと思われる。国際交流基金の事業として、同ワークショップは2013年度まで開催予定とされているが、文化省・博物館関係者から活動の継続を望む声が多い。ぜひ今後も継続してもらいたいプロジェクトである。

4. 金沢大学による事業

金沢大学は、2011年に附属施設として国際文化資源学研究センターを立ち上げ、文化遺産分野における従来の学

問横断の学際的連携にとどまらない、新たな研究や活動の模索をはじめた。同センターは、有形・無形の文化遺産を、新たな価値を創造するための「文化資源」ととらえなおし、その総合的・多角的な研究と保護・活用法の開発を行うことを目標に掲げている（<http://crs.w3.kanazawa-u.ac.jp/>）。このセンターにおいて、すでにさまざまな活動が世界各地で行われてきているが、アルメニアとの関わりにおいては「文化資源学国際コンソーシアムの構築」（日本学術振興会「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」）において、筆者の1人（藤井）がプログラム全体の統括に当たると同時に、他の1人（有村）がアルメニアに派遣され、長期滞在を活かしての考古遺産の調査研究とその活用、あわせてアルメニア人学生の育成に関する活動を行った（藤井・有村 2013、図8-10）。

また、同活動を引き継ぐ形で、2013年度より筆者らは日本学術振興会「二国間交流事業」を活用して新たなプロジェクト「コーカサスにおける先史時代遺跡の立地と景観に関する考古学研究/Landscape Archaeology of Prehistoric Sites in the Caucasus」を開始した。アルメニアの先史時代遺跡の調査を中心として、アルメニアで活動する上記の研究機関や専門家とも連携をとりながら、文化遺産の保護と活用を視野に入れた活動を行っていく予定である。

近年、アルメニアにおける考古学調査は極めて活発である。この国は、長い歴史の間に異民族・異教徒による統治や領土の割譲を幾度となく経験していることから、民族の歴史や文化の探求が民族のアイデンティティを強化するものとして重視されてきた。ソ連邦時代を通じて、アルメニアでは数多くの考古学発掘が行われ、歴史的にも学術的にも重要な考古遺産や歴史的建造物が多数発見された（有村 2013）。先史時代遺跡には、初期人類のユーラシア大陸拡散の足跡を示す旧石器時代の遺跡にはじまり、上述の革靴



図9 アルメニア考古・民族学研究所で実施した考古実測のワークショップ

を出土したアレニ洞窟遺跡などユニークな遺跡がある。続く青銅器時代には、カラシャンプ（Karashmb）など数々の石積みの古墳（クルガン）が造営され、それらの中からしばしば豪華な副葬品が発見されてきた。鉄器時代の遺跡としては、一大勢力を誇ったウラルトゥ帝国が残した城塞都市や砦が点在している。そして、茶色や黒色の凝灰岩で作られた中世キリスト教の教会や修道院は、長年の風雪や地震の被害を耐え、その独特な建築美を今に伝えている。

このように多くの文化遺産を抱えるアルメニアであるが、考古学をはじめとする文化遺産の分野では、若い世代の専門家不足という深刻な課題に直面している。それは、ソ連崩壊後の学問・科学技術分野における教育体制の破たんという、ソ連邦から独立した国々に共通してみられる問題でもある（文化遺産国際協力コンソーシアム 2012）。例えば、アルメニアの考古学界では、エレヴァン大学と考古・民族学研究所が連携することで、学生の教育体制を支えてきた。しかし、ソ連邦時代のような海外との交流が活発でない今、最新の考古学技術や議論について特に若い世代が学ぶ機会は極めて限られている。

ところで、アルメニアにフィールドを移す外国の調査団は年ごとに増えてきており、アルメニアと外国隊との共同調査はますます活発になる傾向にある。その背景には、独立後10年に及ぶ政治的・経済的混乱が一段落し、各種の学術調査を実施できるまでにアルメニアの社会全体にゆとりが生まれてきていることがあるだろう。一方、外国隊のほうでは、21世紀初頭からの西アジア諸国の政治的混乱を受け、より安定して調査できるコーカサス諸国の調査ヘシフトしているという事情が指摘できる。

アルメニアで活動する外国の調査団が増えるとともに、アルメニア人学生がフィールドで外国調査団が用いている技術や方法を目にする機会が増えている。アルメニアでは



図10 アルメニア考古・民族学研究所で実施した石器製作のワークショップ

学ぶ機会の少ないこれらの技術について、若い世代は非常に興味を抱いており、体系的に学ぶ機会を待ち望んでいる。

このような現地のニーズを考えると、アルメニア人学生の育成を組み込んだ共同調査が必要かと思われる。実際のところ、その外国調査団がアルメニア人学生の育成に熱心かそうでないかを別にしても、どの調査団もアルメニア人学生の手を借りて調査を行っており、長期的にみればアルメニア人学生の育成によって調査の質自体が上がることは間違いない。

5. まとめ

本稿では、最近開始されたアルメニアの文化遺産分野における日本人の活動について紹介した。これらの活動では、考古学、保存修復、博物館学といった従来の分野を超えた連携が進められている点や、文化遺産の調査・研究だけでなく、その保護や活用をどのように行うかを重視し、アルメニア人専門家の育成を視野に入れている点に特徴がある。こうした連携は、文化遺産の保護と活用を考える文化遺産学の中ではごく一般的であり、むしろアルメニア国内では、専門家の数が少ないこともあってか、必要に応じて学問分野の垣根を超えた連携が極めて頻繁に行われている。今後、さまざまな分野の日本人専門家が、アルメニアやコーカサスの文化遺産分野に興味をもち参画することを願う。

人材育成を実施するうえで、注意しなければならない点がある。それは、人材育成プログラムに参加する側にとって、自主的に参加したくなるようなプログラムが提供できているかということである。参加者にとって役に立ったと実感できる内容であれば、参加者はより積極的にプログラムに参画してくる。人材育成プログラムを作成するときに、しばしば自分たちの価値基準で、活動項目を決定しが

ちである。参加者がどのような問題を抱えているのかといった彼らのニーズを把握しながら、プログラムを作っていく必要性を感じている。

また、これから文化遺産分野の専門家が、歴史学、文学、比較文化研究といった他の学問領域と接点をもつことも、アルメニアにおける文化活動の活性化という意味で重要であろう。先日、国際交流基金の援助による会議「Dialogue of Armenian, Russian and Japanese Cultures: The Experience of Comparative Analysis」が開催され、著者の1人（有村）も発表の機会を得た（2013年9月27～28日、エレヴァン、スラブ大学）。この会議の主催者であるカリネ・カラミヤン（Karine Karamyan）をはじめ日本に興味をもつアルメニアの人々も少なくはない。日本・アルメニア間の交流のひとつとして、また、文化遺産の価値を地元の社会に伝えていくためにも、このような学術会議に参加していくことも大切かと思われる。

一昨年、在京のアルメニア大使館が開設された。アルメニアにはまだ日本大使館は開設されていないものの、本稿で触れてきたように日本人による文化遺産保護分野における共同調査や支援は活発化してきた。これらの活動は、顔の見える支援・交流として今後さらに重要であり、また、国際舞台で活躍する日本人専門家の育成にもつながると考えられる。日本から遠く離れたアルメニアではあるが、文化遺産の分野における両国の交流はますます活発になるだろう。

謝辞

アルメニアでの調査を実施するにあたり、以下の方々や機関にたいへんお世話になりました。ここに記して心より感謝申し上げます。

アルメニア文化省、アルメニア歴史博物館、アルメニア歴史文化遺産科学研究センター、在京アルメニア大使館、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所、国際交流基金、公益財団法人平山郁

夫シルクロード美術館、Christine CHTAIGNER、Pavel AVETISYAN、Boris GASPARYAN、Artur PETROSYAN、Anelka GRIGORYAN、Yelena ATYOYANTS、川野邊 渉、山内和也、邊牟木尚美、藤澤明、関根恵梨子、石井美恵、横山翠、Ruzan KHOJIKYAN、Lilit KHANSULIAN、Karine KARAMYAN、長谷川有彦、渡辺大作、津守京子（敬称略）。

註

- 1) 文化遺産分野には、歴史学、文化人類学、考古学、建築史など文化遺産そのものを研究対象とする学問から保存修復、博物館学、文化遺産マネジメント、観光学、社会学など文化遺産の保護や活用の在り方を研究する学問まで多様な領域が含まれる。近年、これら諸学問が連携し、より大きな視点で文化遺産の研究、保護、活用を目的とした学問領域として文化遺産学 Cultural Heritage Studies という学問も定着しつつある。

引用文献

- Pinhasi, R., B. Gasparian, G. Areshian, D. Zardaryan, A. Smith, G. Bar-Oz and T. Higham 2010 First Direct Evidence of Chalcolithic Footwear from the Near Eastern Highlands. *PLoS ONE* 5 (6): e10984.
- アイスキュロス（呉 茂一訳）1974『縛られたプロメテウス』岩波書店。
- 有村 誠 2013「コーカサス」『西アジア考古学講義ノート』77-78頁 日本西アジア考古学会。
- 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター 2013『アルメニア歴史博物館所蔵考古金属資料の保存修復と自然科学的調査 2011・2012年度（第1次～第4次ミッション）』日本－アルメニア文化遺産保護協力事業報告第1巻 東京文化財研究所。
- 藤澤 明・有村 誠・邊牟木尚美・山内和也・A. Grigoryan 2013「アルメニア歴史博物館における考古金属資料の保存修復ワークショップに伴う科学的調査」『保存科学』52号 81-89頁。
- 藤井純夫・有村 誠 2013『多民族国家の多民族的文化遺産学』金沢大学文化資源学第11号 金沢大学国際文化資源学研究センター。
- 文化遺産国際協力コンソーシアム 2012『平成22年度協力相手国調査 アルメニア共和国調査報告書』文化遺産国際協力コンソーシアム。

有村 誠

金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系

Makoto ARIMURA

Kanazawa University

Faculty of Letters,

Institute of Human and Social Sciences

藤井 純夫

金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系

Sumio FUJII

Kanazawa University

Faculty of Letters,

Institute of Human and Social Sciences